

# 吃音の基礎知識と 新たな視点

伊藤友彦

東京学芸大学名誉教授

(日本言語障害児教育研究会第55大会)

## はじめに

- 吃音がある子どもを正しく理解し、適切な支援を行うために教員、保護者をはじめ、周囲の人々が吃音について可能な限り正確な知識をもっていることが必要

1

2

## 1. 吃音の基礎知識

### 1) 吃音の定義・特徴・出現率

3

4

### 吃音の定義は？

#### ■ わかりやすい定義

「話しことばの流れが、音・音節の繰り返しや引き伸ばし、異常な中止によって妨げられるコミュニケーションの障害」

(アメリカ吃音財団ウェブサイトの「F. A. Q.」より, 2021)

- 話しことば (speech) の問題とみなす立場からの定義と、話しことば以外の問題も含んだものとみなす立場からの定義がある。

### 吃音の中核的な特徴は？

#### ■ 言語症状: 語頭の

音・音節の繰り返し、  
引き伸ばし  
ブロック(つまること)

5

6

## 吃音の言語症状以外の特徴は？

- 随伴症状 (随伴運動)：話そうとする努力による、不自然な顔や体の動き(顔をゆがめる、手を固くにぎる、目をとじる、目をみはる、腕を振る、足を動かす、など)
- 自覚：自分が吃るという意識
- 情緒反応：緊張、いらだち、とまどい、あせりなど
- 語音困難：吃りやすい音の固定
- 場面困難：吃りやすい場面の固定
- 工夫：話し始めに「あー」をつける、小さい声で言う、早口で言う、話さないようにする(回避)、など

7

## 吃音のある人はどれだけいるのか？

- 発生率 (Incidence)\* は約5%  
(最近の研究では8%かそれ以上, Yairi & Seery, 2015)  
\* 吃音が消失した人も含めた値
- 有病率 (Prevalence) は約1%  
(最近の研究では0.7%、幼児期は2%, Yairi & Seery, 2015)
- 吃音を呈するリスクは男性の方が女性の2倍であり、長期間持続するリスクも女性より高い (Yairi & Seery, 2015)

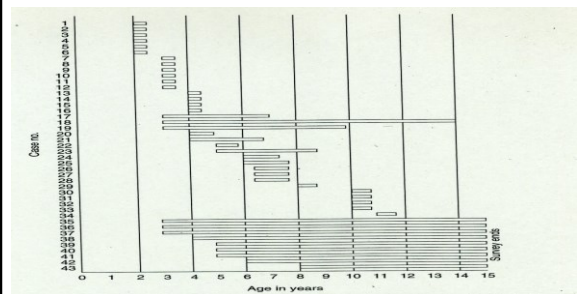
8

## 2) 吃音の発生・回復・持続

9

## 吃音の発生・回復・持続

(Andrews ら (1964) の15年間の縦断研究, (Bloodstein & Bernstein Ratner, 2008より))



10

## 吃音はいつ、どのように始まるのか？

- いつ？  
60%以上が3歳より前に、85%が4歳までに発生
- どのように？  
始まりは突然である。  
吃音のさまざまな特徴を含んでおり、子どもによっては重い症状を示す。  
語頭音節の繰り返しが普遍的にみられるが、他の特徴は子どもによって異なる。

(Yairi & Seery, 2015)

11

## 吃音の発生後の経過は？

- 初期の吃音のもっとも典型的な経過は吃音の減少、重症度の軽減
- 多くの子どもは臨床的介入を受けることなく、完全に回復(自然回復ないしは自然治癒と呼ばれる)
- 幼児期はほとんどの吃音が発生する時期であるのみならず、その障害が自然に消失する時期

(Yairi & Seery, 2015)

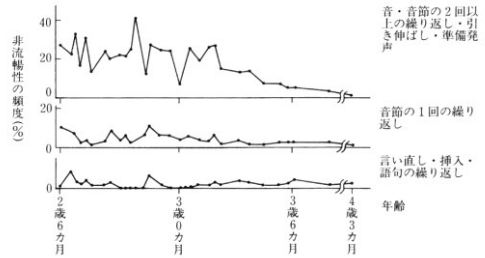
12

## 吃音が消失する人の割合は？

- 学齢前: 68~94% (11の縦断研究に基づく)
  - 学齢後: 36~52% (3つの縦断研究に基づく)
- (Yairi & Seery, 2015)
- ほとんどの自然回復は発症後、数か月から3年の間におこる。
- (Yairi and Ambrose, 2005)

13

## 自然回復の例 (伊藤, 1986)



14

## 3) 吃音の原因論

15

## 何が吃音を引き起こすのか？

- 吃音の原因について明確なことはわかっていない。
  - 吃音の進展(悪化)にかかわる4つの要因
    - ① 遺伝的要因: 約60%の人が家族にも吃音
    - ② 発達要因: 言語の問題を併せ持っている場合など
    - ③ 神経生理学的要因: 言語処理が異なる可能性
    - ④ ファミリーダイナミクスの要因: 高い期待やペースの速いライフスタイル
  - 吃音は複数要因の結びつきによって生じるかもしれないし、人によって原因が異なるかもしれない。
  - 吃音の発生原因と進展要因とは異なる可能性がある。
- (アメリカ吃音財団ウェブサイトの「F. A. Q」より, 2021)

16

## 吃音は情緒的な問題や心理的な問題で引き起こされるのか？

- 吃音を有する子どもや大人の方が、吃音をもたない子どもや大人よりも情緒的な問題や心理的な問題をもっているということはないようである。
- 心的外傷が吃音を引き起こすと信ずる理由はない。

(アメリカ吃音財団ウェブサイトの「F. A. Q」より, 2021)

17

## 吃音の原因に関する研究史①

(Bloodstein & Bernstein Ratner, 2008 より)

- 吃音は神経症的障害 (psychoneurotic disorder) であると考えられた時代(20世紀のかんりの期間)。
- 吃音がある人のパーソナリティに関する多くの研究を生み出したが、やがて消滅 (downfall) した。

18

## 吃音の原因に関する研究史②

(Bloodstein & Bernstein Ratner, 2008 より)

- 吃音は、正常な非流暢性を吃音とみなす親の診断によって生じるという考えの時代(1950年代に診断起因説)。
- 大規模な研究が行われたが、最終的にこの仮説は信用を失った。

19

## 吃音の研究史③

(Bloodstein & Bernstein Ratner, 2008 より)

- 吃音が情緒的な障害でないとする、神経学的な障害であることになる。
- 神経言語学的、神経運動学的基盤について必ずしも一致した知見が得られているわけではないが、この見方が妥当である可能性を示す知見が蓄積されてきている。

20

## 4) 吃音のある子どもへの支援

21

## 吃音のある人と話すときの基本的な心構え

- 「ゆっくり話してごらん」、「落ち着いて」などと言わない。
- 話し方ではなく、話すことに耳をかたむけていることを態度や行動で示す。
- 自然なアイコンタクトを保ち、相手が話し終わるまで辛抱強く待つ。
- 文を終わらせてあげたり、単語を言ってあげたいかもしれないが、そうしないようにすべきである。
- 電話をとったときに相手の音声がかえなかった場合、吃音のある人が発話を開始しようとしている可能性があることに配慮する。
- 不自然にならない程度に、ゆっくりとした落ち着いた話し方をする。

(アメリカ吃音財団ウェブサイトより)

22

## 担任教師の役割は？

- 「もっとゆっくり」とか「あわてないで」などと言わない。
- 途中から代わりに言ってあげたりしない。
- 会話における話し手と聞き手の交代についてクラス全員が学べるようにする。
- 勉強など(work)については他の子と同じ質と量を期待する。
- 急がずに間を頻繁にとって話す。
- 話し方ではなく話す中身に耳を傾けていることをよく伝えておく。
- どのようなニーズがあるかについて一対一で話をする。
- 吃音を何か恥ずべきもののように扱わない。他のことと同じように吃音についても話す。

(アメリカ吃音財団ウェブサイトより)

23

## 言語障害専門教師の役割は？

- 自由に話ができる場を提供してくれた。
- 吃っても自由に話し合えると感じさせてくれた。
- 吃っても笑われたり、叱られたりすることがなかった。
- 他の誰もが口にするのがなかった自分の吃音について学ぶことができた。
- 私は吃音に触れ、直面できる安全な場所が欲しかった。

(Dell, 1994)

24

## 指導方法にはどのようなものがあるか？

- 間接的アプローチ  
吃音の進展に影響すると思われる環境要因(学校、家庭など)に視点があてられる
- 直接的アプローチ  
吃音症状そのものを変えることに視点があてられる

25

## 2. 新たな視点

“A Handbook on Stuttering” (2021) より

26

### 第11章: 吃音の生起に影響する条件

(Bloodstein, et al., 2021)

- マスキング、メトロノーム、遅延聴覚フィードバック (DAF)、ゆっくり話すこと、斉読などは少なくとも一時的には流暢な発話を生み出すことができる。
- これらの条件や要因は目新しい話し方のパターン (novelty of the pattern) によるという説明が可能である。
- これらは吃音頻度を変化させることができるけれども一時的である。

27

### 第12章: 吃音に関する根拠のない話(1)

(Bloodstein, et al., 2021)

- 吃音は神経質であることや不安によって引き起こされる。
- 吃音は内気 (shyness) であることによって引き起こされる。
- 吃音は心理的な障害である。
- 吃音は知的障害によって引き起こされる。
- 吃音は精神的(心的)外傷によって引き起こされる。
- 吃音は冷たい (“cold”) または悪い子育てによって引き起こされる。

28

### 第12章: 吃音に関する根拠のない話(2)

(Bloodstein, et al., 2021)

- 左利きを無理に右利きにすることが吃音を引き起こす。
- 吃音というラベルを張り、吃音症状に注意を向けることが持続性の吃音を引き起こす。
- 聞こえなければ吃らない(吃音はdeaf communityでは生じない)。
- バイリンガルな環境で育てられると吃音が生じやすい。

29

### 第12章: 吃音に関する根拠のない話(3)

(Bloodstein, et al., 2021)

「ゆっくり、落ち着いて」(“Slow Down and Relax”)という助言が有効だと思っている人が非常に多い。「深く息を吸って」と一緒に用いられる。この根拠のない話は今でも生き残っているが、助けになることはまったくない。多くの人が指摘しているように、この助言が実際に効果があったら吃音は消失していて、本書も必要がなくなる。

30

## 第13章:吃音の評価

- 評価のプロセスにおいて大事な点は対象者のカウンセリングである。
- 幼児の場合は両親のカウンセリングである。
- カウンセリングは、情報を提供するものであり、教育的であるとともに、支援的である。
- カウンセリングはさらに、吃音のある人とその家族に、吃音とはどういうものであって、どういうものでないかをしっかりと理解してもらい、自分たちが望む目標に向かってできることは何かを伝える。

31

## 第14章:指導 (treatment)

- 本書の次の版が出版されるまでに、「どの指導法が最も優れているか」と問うのをやめて、「どの介入方法が誰に最もふさわしいか」を問うようになることを期待している。
- この重要な問いの答えがすぐに見つかるという考えに心から同意し、そのように願っている。

32

## おわりに

33

## インクルーシブ教育をめざす時代の言語障害児教育

- インクルーシブ教育では、子どもの学習、生活上の困難を、子ども自身の要因と子どもを取り巻く周囲の要因との相互作用として捉える。
- 言語障害のある子どもの教育においても言語障害の種類や程度にのみ着目するのではなく、一人一人の子どもの教育的ニーズに注目する必要がある。
- ことばの教室の先生以外の人々(保護者、担任、管理職、医療関係者など)とのチームアプローチが大事である。

34

## インクルーシブ教育をめざす時代の吃音のある子どもの教育

- 吃音のある子どもについても、吃音症状など個体要因のみに着目せず、周囲の要因(担任教師、同じクラス子ども、学校全体)の改善めざすことが重要である。
- 学校は、合理的配慮として、吃音のある子どもが自由に話せる環境を整える必要がある。

35

## おもな文献

- Bloodstein, O. & Bernstein Ratner, N. (2008). *A handbook on stuttering* (6<sup>th</sup> ed.). Clifton Park, NY: Delmar.
- Bloodstein, O., Bernstein Ratner, N. & Brundage, S. B. (2021). *A handbook on stuttering* (7<sup>th</sup> ed.). San Diego, CA: Plural Publishing.
- 柘植雅義 (2014) 特別支援教育の理念とシステム. 柘植雅義・渡部匡隆・二宮信一・納富恵子(編)はじめての特別支援教育(改訂版). 有斐閣, 1-94.
- Stuttering Foundation of America (アメリカ吃音財団). *The Stuttering Foundation*. <https://www.stutteringhelp.org> (2021年7月28日時点)
- Yairi, E., & Ambrose, N. (2005). *Early childhood stuttering: For clinicians by clinicians*. Austin, TX: Pro-Ed.
- Yairi, E., & Seery, C. (2015). *Stuttering: Foundations and clinical applications*. New York, PEASON.

36